

大学生における生徒化心性および大学環境の 認知と適応感との関連 —生徒化心性尺度の作成と大学差による検討—

大久保智生（教育学部准教授）

西本 佳代（大学教育基盤センター准教授）

鶴 綾乃（株式会社松下印刷）*

1. はじめに

本研究の目的は、大学生の生徒化心性に関する尺度を作成し、大学生の生徒化心性および大学環境の認知と適応感との関連について、偏差値による大学差を考慮して検討することにある。

大学生が「生徒化」した、と指摘されるようになって久しい。大学生の「生徒化」という用語は、伊藤（1999）が「今日の大学生における、学力の低下が目立つわりに授業の出席率は奇妙に高い現象」（85頁）を大学生の「生徒化」と表現したことに始まる。この指摘の背景には、「生徒」とは他律的、依存的に「教えられる」存在であるのに対して、「学生」は自律的に「学ぶ」存在である、という考えがある（伊藤、2015）。

大学生の生徒化に関する先行研究は、これまで、主に教育社会学の分野で蓄積されてきた。例えば、伊藤（1999）は生徒化した大学生は何らかの「生徒的な意識」を持っていることを明らかにし、大学生の生徒化の尺度を作成した。また、岩田（2015）は、「生徒化」心性を抽出し、学生の属性・行動特性について分析した。しかしながら、大学生の生徒化について心理学では十分な検討が行われてこなかった。同じ質問紙調査でも、教育社会学と心理学では、尺度の作成や妥当性の検討という点で違いがみられる。教育社会学と比べて、心理学では尺度の作成において手続きを重視する。特に本研究で焦点を当てる大学生の「生徒化」という現象は、多様な側面において確認されるため、多くの因子を用いて、その様相を明らかにする必要がある。また、妥当性の検討については、尺度の作成を目的とする研究においては欠かせない作業である。本研究では、大学生の「生徒化」という現象について、心理学的アプローチを行い、生徒化心性を測定する尺度を作成する。

ところで、大学生の「生徒化」の背景のひとつとして、大学の「学校化」が挙げられる（新立、2010）。「大学」とは高等学校以下の「学校」とは異なる機関であり、学ぶ者の能動的な意欲に基づき学問をする場であった（浜島、2003、山田、2010）。大学の「学校化」とは、大学を高校や中学のような中等教育機関と同じような機能を持つ学校に変えていこうという動きである（渡部、2005）。単位制、学期制、カリキュラム、授業評価、FDなどにより

* 2017年3月香川大学教育学部卒業

大学の教育組織が効率化・制度化されたことで、結果として大学は「学校化」したと考えられている（田中、2013）。

先行研究においては、大学の「学校化」と表現されるような、大学環境の変化が大学生の「生徒化」に影響を及ぼしたとされる。例えば、松下（2012）や伊藤（1999）は、必修の授業が多いと学生の自律性を奪うことになり、初年次教育の懇切丁寧なガイダンスは学生を生徒として扱うことになると指摘する。そのため、本研究では、生徒化心性を測定する尺度の作成にあたり、大学環境の認知、大学環境への適応についても検討する。

以下では、第2章で予備調査について確認した後、第3章で本調査の結果を検討する。なお、本調査の検討にあたっては、先行研究の指摘（山田、2009、櫻田、2007）に鑑み、大学の偏差値を考慮した分析も行う。その後、第4章で総合考察を行い、第5章で大学生の「生徒化」という現象について考察する。

2. 予備調査

2-1. 目的

大学生および大学教員を対象に大学生の生徒化に関する自由記述を収集し、カテゴリごとに分類し、尺度の項目を精選することを目的とした。

2-2. 方法

(1) 対象者と実施時期

大学教員13名（男性9名、女性4名）、大学生および大学院生151名（男性66名、女性85名）の計164名（男性75名、女性89名）を対象とした調査を2016年10月に実施した。

(2) 手続き

対象者に対して、「近年の大学生が生徒化していると感じるかどうか」について、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で回答を求めた。次に、「大学生がどのような意識で生徒化しているか」として自由記述で回答を求めた。

2-3. 結果と考察

現代の大学生の生徒化について検討するため、それぞれの回答の割合を算出した。その結果、「はい」が56人（34.1%）、「どちらでもない」が83人（50.6%）、「いいえ」が25人（15.2%）であった。教員については、大学生の生徒化について大半が「はい」と回答しているが、学生は以前の大学を知らないことから「どちらでもない」と回答していることもあり、実際に生徒化しているといえるのかは単純に結論づけられない。なお、本研究では、実際に生徒化しているかという問題については触れずに検討していく。

大学生の生徒化の意識について検討するため、得られた自由記述について大学教員1名と大学生3名で討議を行い、カテゴリ分類を行った（表1）。その結果、8つのカテゴリ

が抽出された。それぞれのカテゴリーの記述数は、「単位の重視」(17件)、「出席の重視」(15件)、「探求心の無さ」(12件)、「甘え」(12件)、「楽観視」(9件)、「学習意欲の低さ」(8件)、「表面上のまじめさ」(8件)、「目的意識の低さ」(6件)であった。生徒化の意識としては、単位や出席の重視、探求心の無さ、甘えや楽観視、学習意欲の低さ、表面上のまじめさ、目的意識の低さなどが考えられていることが示された。

表1 自由記述の分類結果

カテゴリー	具体例	度数 (割合)
単位の重視	単位さえ取れば良いと思っている 単位が全てと感じている 授業の面白さ、専門性よりも楽に単位をとれる授業を求める	17 (19.5)
出席の重視	授業にだけは出席する学生が多い 出席さえすれば良いと考えている 授業は出席するだけで聞かなくてもいいと思う	15 (17.2)
探求心の無さ	主体的に考えなくてもやれと言われることだけをやっていれば良いと思っている わからないことがあっても教えてくれないことが悪いという 言われたことはきちんとするが言われた以上のことはしない	12 (13.8)
甘え	やるべきことは大学が用意してくれると思っている 高校の延長線上のものだと思っている 何をすればいいか指示を与えてくれる人を待つ	12 (13.8)
楽観視	授業を受けていれば良いと思っている 主張すれば受け入れられると思っている まじめにしていればなんとかしてくれると思っている	9 (10.3)
学習意欲の低さ	自分で学ぶことへの無関心 テストがある科目はとりたがらない 勉強したくない	8 (9.2)
表面上のまじめさ	学ぶ内容より成績を気にする 正解があると思っている 大学はいかなくてはいけないものと考えている	8 (9.2)
目的意識の低さ	資格の取得を大学に期待している 大学は就職に結びつくためだけのものと考えている 単位や卒業のみを目標としている	6 (6.9)

3. 本調査

3-1. 目的

生徒化心性尺度を作成し、大学生の生徒化心性および大学環境の認知と適応感との関連について、偏差値による大学差を考慮して検討することを目的とした。

3-2. 方法

(1) 対象者と実施時期

私立及び国立大学9大学に通う大学生746名(男性254名、女性488名)を対象とした調査を2016年12月に実施した。偏差値による大学差は、上位大(偏差値60程度、国立1大学、私立2大学)、中位大学(偏差値50程度、国立3大学)、下位大学(偏差値40程度、私立3大学)の3分類で分析した。

(2) 手続き

対象者に対して、以下の5つの尺度を実施した。

①生徒化心性：伊藤（1999）の生徒化尺度、三保・清水（2011）の大学での学習観尺度と予備調査で得られた8つのカテゴリーに基づいて生徒化心性尺度45項目を作成した。回答形式は、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）の5件法であった。

②学業意欲低下：生徒化心性尺度の妥当性を検討するために、下山（1995）の意欲低下領域尺度のうち「学業意欲低下」因子5項目を用いた。回答形式は、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）の4件法であった。

③自律性欲求：生徒化心性尺度の妥当性を検討するために、安藤（2007）の自律性欲求尺度の「自己決定」「独立」の2因子24項目を用いた。回答形式は、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）の回答形式は5件法であった。

④大学学業文化：大学環境の認知を測定するために、神藤・伊藤（2000）の大学学業文化尺度の「教授過程」「自由」「興味」「学生」の4因子16項目を用いた。回答形式は、「まったくなかった」（1点）から「よくあった」（4点）の4件法であった。

⑤大学環境への適応感：大学環境への適応感を測定するために、大久保・青柳（2003）の適応感尺度のうち「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題・目的的存在」の3因子23項目を用いた。回答形式は、「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）の5件法であった。

3-3. 結果と考察

(1) 生徒化心性尺度の検討

生徒化心性尺度45項目に対して、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った（表2）。因子負荷量の絶対値0.35以上を示した項目を参考に3因子26項目が妥当であると考えられた。第1因子は、「単位を落とさない程度であれば、授業や課題に対して手を抜いてもよいと思う」や「大学を卒業さえできればよいと思う」など、大学での学びに対する消極的な姿勢を表しているので、「学問に対する消極的姿勢」因子と解釈した。第2因子は、「何か問題が起きたときは大学や教員が助けてくれると思う」や「大学生活に関する手続きをするとき、間違いがあれば大学や教員が指摘してくれると思う」など、大学生活における自律性のなさを表しているので、「大学生活に対する非自律性」因子と解釈した。第3因子は、「出席したら点になる授業を好む」や「学ぶ内容よりも成績のほうが気になる」など、うわべだけの真面目さを表しているので、「表面的な真面目さ」因子と解釈した。

尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子は0.854、第2因子は0.745、第3因子は0.611であった。第3因子はやや低い値ではあったが、内的整合性の観点から一応の信頼性が保証された。

表 2 生徒化心性尺度因子分析結果

項目	I	II	III
I : 学問に対する消極的姿勢 ($\alpha = .854$)			
単位を落とさない程度であれば、授業や課題に対して手を抜いてもよいと思う	.747	.022	-.187
大学を卒業さえできればよいと思う	.676	-.036	.068
単位さえ取ればよいと思う	.653	-.071	.176
大学の授業は出席さえすればよいと思う	.642	.091	.117
出席重視の授業は、出席さえしていればレポートなどの課題が雑でも単位をもらえると思う	.631	.058	-.225
レポートを書くときは、よい成績をとるためなら思ってもいないことを書いてもよいと思う	.550	-.033	.023
楽に単位が取れる授業を先輩や友だちに教えてもらいたいと思う	.499	-.071	.196
出席さえしていれば、授業は聞かなくてもよいと思う	.476	.060	.188
大学での授業はただ座って教員の話聞いていけばよいと思う	.468	.125	.092
授業を聞いていなくても与えられた課題をやっていればよい成績をとれると思う	.467	.023	.005
授業に関して自分から質問しようとは思わない	.439	-.150	.143
しなければならぬことをしていなくても、なんとか卒業はできると思う	.420	.144	-.238
授業を休むときは友だちに代筆や代返をもらいたいと思う	.413	.068	-.035
II : 大学生活に対する非自律性 ($\alpha = .745$)			
何か問題が起きたときは大学や教員が助けてくれると思う	-.146	.639	.032
大学生活に関する手続きをするとき、間違いがあれば大学や教員が指摘してくれると思う	.015	.609	-.132
留年しそうになったら教員が助けてくれると思う	.073	.575	-.058
やるべきことは大学が用意してくれると思う	.187	.487	.054
大学や教員が学生の大学生活の世話をするのは当たり前だと思う	.175	.478	.045
親や教員にまだ頼っていてもよいと思う	.124	.436	-.065
自分はまだ大人ではないので、親や教員の言うことに従っておこうと思う	.025	.353	.289
大学の教員は小中高の教員のようにもっと学生を指導すべきだと思う	-.101	.350	.225
III : 表面上の真面目さ ($\alpha = .611$)			
出席したら点になる授業を好む	.106	-.036	.562
学ぶ内容よりも成績のほうが気になる	.243	-.070	.482
授業を受ける姿勢や態度はともかく、出席することが何よりも大事だと思う	-.113	.083	.476
テストにどんな問題が出るのかを授業の中で具体的に教えてほしい	.111	-.098	.443
何事にも教員の許可をもらって進めたい	-.276	.336	.433
因子間相関行列			
	I	II	
I 学問に対する消極的姿勢			
II 大学生活に対する非自律性	.243		
III 表面上の真面目さ	.531	.218	

尺度の妥当性を検討するため、学業意欲低下尺度と自律性欲求尺度との相関係数を算出した (表 3)。その結果、学業意欲低下尺度との関連では、相関係数は全て有意な正の関連を示し、 $r = .073 \sim .428$ の範囲であった。自律性欲求尺度との関連では、「自己決定」との間で相関係数は全て有意な負の関連を示し、 $r = -.305 \sim -.344$ の範囲であった。「独立」は「大学生活に対する非自律性」との間のみ有意な負の関連を示し、 $r = -.078$ であった。

学業意欲低下尺度との関連では、すべての下位尺度と有意な正の関連がみられた。「学問に対する消極的姿勢」は学問に対する意欲のなさを表しているため、生徒化心性尺度と正の関連を示していたことは納得のいく結果といえる。学業意欲低下尺度と「大学生活に対

する非自律性」との間で得られた相関係数はあまり高くはなかったが、「大学生活に対する非自律性」は、学業面だけでなく大学生活全般に対する自律性のなさを表しているため、学業面での意欲低下を表す学業意欲低下尺度と強い関連がみられなかったと考えられる。自律性欲求尺度との関連では、すべての下位尺度と「自己決定」との間で有意な負の関連がみられた。このことから、生徒化心性は、物事を決めるときは自分ではなく他者に従おうとする姿勢と関連があることが明らかになった。「独立」との間ではあまり関連がみられなかった。「独立」は周りがどうであろうと自分のやりたいようにやりたいという欲求を測定する下位尺度であるため、生徒化心性とはあまり関連がみられなかったと考えられる。

表3 生徒化心性尺度と学業意欲低下尺度、自律性欲求尺度との関連

	学習意欲低下	自己決定	独立
学問に対する消極的姿勢	.428**	-.305**	-.018
大学生活に対する非自律性	.073*	-.344**	-.078*
表面的な真面目さ	.270*	-.314**	-.064

*p < .05 **p < .01

(2) 生徒化心性および大学環境の認知の大学の偏差値による差の検討

大学の偏差値による差の検討を行うため、生徒化心性尺度、大学学業文化尺度をそれぞれ従属変数、大学差を独立変数として1要因分散分析を行った(表4)。その結果、「学問に対する消極的姿勢」(F(2,727)=9.151, p<.001)、「大学生活に対する非自律性」(F(2,733)=12.433, p<.001)、「表面的な真面目さ」(F(2,738)=5.474, p<.01)、「自由」(F(2,736)=6.698, p<.01)、「興味」(F(2,736)=12.374, p<.001)、「学生」(F(2,733)=3.208, p<.05)において、3群間に有意差がみられた。Tukey法の多重比較を行った結果、「学問に対する消極的姿勢」、「自由」、「学生」では、上位大と中位大が下位大よりも得点が有意に高く、「大学生活に対する非自律性」、「表面的な真面目さ」、「興味」では下位大が上位大と中位大よりも得点が有意に高かった。

「学問に対する消極的姿勢」では、上位大と中位大が下位大よりも得点が高かった。大学での授業形態に関する先行研究では、授業に積極的に取り組む姿勢と教員との距離は関連しており、受講者数が多い授業に対して学生は不満を持っていることが明らかになっている(大矢、2016)。このことから、授業に対する積極的な姿勢は教員との距離や受講者数が関係していると考えられる。今回調査対象となった大学の規模を比較すると、上位大と中位大の6大学の規模は下位大の約4倍以上であった。これらのことから、大学の規模が大きく一つの授業に対する受講者数が多くなることで消極的に取り組むようになることが考えられる。

表 4 大学群ごとの生徒化心性および大学学業文化の平均値と 1 要因分散分析結果

	上位大 (N = 240)	中位大 (N = 344)	下位大 (N = 158)	F 値	多重比較
学問に対する消極的姿勢	39.475 (8.465)	38.478 (8.726)	35.632 (9.632)	9.151***	上位大、中位大>下位大
大学生活に対する非自律性	19.716 (4.813)	19.800 (4.919)	22.006 (5.380)	12.433***	下位大>上位大、中位大
表面的な真面目さ	16.504 (3.321)	16.834 (3.380)	17.618 (3.315)	5.474**	下位大>上位大、中位大
教授過程	14.076 (2.637)	14.295 (2.528)	14.389 (2.870)	783	n. s
自由	9.113 (1.730)	8.965 (1.690)	8.481 (1.801)	6.698**	上位大、中位大>下位大
興味	11.190 (2.192)	10.916 (2.278)	12.013 (2.503)	12.374***	下位大>上位大、中位大
学生	12.409 (1.913)	12.336 (2.084)	11.905 (2.192)	3.208*	上位大、中位大>下位大

カッコ内は標準偏差

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

「大学生活に対する非自律性」では、下位大が上位大と中位大よりも得点が高かった。偏差値が低い大学の学生は資格取得やキャリア教育の充実を重視しており（櫻田、2007）、大学側もこうした学生のニーズに合わせて資格取得を支援する取り組みを重視し（葛城・山田、2005）、学生の進路支援や就職指導に力を入れている（ベネッセ総合研究所、2000）ことが示されている。このことから、下位大では、学生の就職や卒業に対するサポートが手厚いため、学生は大学生活全般においても非自律的になると考えられる。

「表面的な真面目さ」では、下位大が上位大と中位大よりも得点が高かった。大学の偏差値ごとに学生の意識調査を行った山田（2009）は、偏差値が低い大学の学生は、授業中に私語をしたり授業に関係ない本を読んだりすることはせず、受講態度は真面目であることを示している。このことから、下位大の学生は表面的に真面目に授業を受講していると考えられる。

「自由」では、上位大と中位大が下位大よりも得点が高かった。葛城（2011）は、全入状態にある「ボーダーフリー大学」で教員は研究よりも学生を教育することに重きを置いていることを明らかにしている。下位大では教員が学生を指導する一方で、上位大や中位大では教員はそこまで学生を指導せず、学生の自主性を尊重しているため、上位大や中位大の学生は大学生活において自由さを感じていると考えられる。

「興味」では、下位大が上位大と中位大よりも得点が高かった。「興味」は「希望の授業を登録することができたこと」「単位にしばられて、とりたい授業が登録できないと思ったこと（逆転項目）」などの項目で構成されているため、上位大や中位大の学生は自分の興味のある授業を履修できなかったと感じているということが明らかとなった。決められた授業を履修し、その授業をまじめに受講するという態度が定着した下位大の学生に比べ、上位大や中位大の学生には決められた授業以外に自分の興味のある授業があり、それをなかなか履修できず不自由を感じていると考えられる。

「学生」では、上位大と中位大が下位大よりも得点が高かった。「学生」は「授業中、学

生の教室の出入りが多く気になったこと」「授業に出ない人が多いと思ったこと」など、学生の特徴に関する項目で構成されている。在学者数が多いほど多様な特徴をもつ学生が存在することを踏まえると、大学の規模が大きい上位大や中位大のほうが下位大よりも得点が高くなることは妥当な結果であると考えられる。

(3) 生徒化心性および大学環境の認知と大学環境への適応感の関連の偏差値別の検討

生徒化心性および大学環境の認知・大学環境への適応感との関連を大学ごとに検討するために、大学環境への適応感尺度を従属変数、生徒化心性尺度および大学学業文化尺度を独立変数として群ごとにそれぞれ重回帰分析を行った（表 5、6、7）。

上位大において、「居心地の良さの感覚」は、「自由」($\beta=.197, p<.01$)との間に正の関連がみられた。「被信頼・受容感」は、「自由」($\beta=.210, p<.01$)との間に正の関連がみられた。「課題・目的の存在」は、「自由」($\beta=.318, p<.001$)との間に正の関連、「教授過程」($\beta=-.190, p<.05$)との間に負の関連がみられた。

上位大において、生徒化心性は大学環境への適応感とは関連がなく、大学学業文化が自由であるかどうか適応感に影響していることが明らかになった。先行研究では、授業中に授業内容とは関係ない本を読んだり他の勉強をしたりする学生が、偏差値が高い大学のほうが多いことが示されている（葛城、2007）。このことから、偏差値が高い大学の学生は、学業面において自分の意志に応じて自由にふるまい、そのことが大学への適応と結びついていると考えられる。

表 5 生徒化心性および大学学業文化と適応との関連（上位大）

	居心地の良さの感覚	被信頼・受容感	課題・目的の存在
学問に対する消極的姿勢	.105	.013	-.089
大学生活に対する非自律性	-.069	.008	-.062
表面的な真面目さ	-.040	-.051	-.070
教授過程	-.059	-.085	-.190*
自由	.197**	.210**	.318***
興味	-.025	-.031	-.056
学生	.048	.089	.108
重相関係数	.228	.248†	.419***

値は標準偏回帰係数 † $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

中位大において、「居心地の良さの感覚」は、「自由」($\beta=.305, p<.001$)との間に正の関連がみられた。「被信頼・受容感」は、「大学生活に対する非自律性」($\beta=.156, p<.01$)、「自由」($\beta=.274, p<.001$)との間に正の関連、「学問に対する消極的姿勢」($\beta=-.129, p<.05$)との間に負の関連がみられた。「課題・目的の存在」は、「自由」($\beta=.389, p<.001$)、「興味」($\beta=.116, p<.05$)との間に正の関連、「学問に対する消極的姿勢」($\beta=-.165, p<.01$)との間に負の関連がみられた。

中位大において、「大学生活に対する非自律性」と「被信頼・受容感」との間に正の関連がみられた。現代の大学生は、互いに傷つけ合わないよう自己防衛的で表面的な友人関係を築き（岡田、2012）、友人関係において同調行動をとるほうが大学での適応感が高くなる（五十嵐・野村・岩崎、2014）。また、大学の偏差値ごとに学生の意識を調査した谷田川（2009）によると、授業を受けたり昼食を食べたりするのに友人と一緒にするという学生は偏差値が中程度の大学に多いことが明らかになっている。これらのことから、中位大の学生は、周囲の友人に対して同調することで受容感を得ることが考えられる。また、「学問に対する消極的姿勢」と「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」との間に負の関連がみられた。近年の学生は学業以外にもアルバイトやサークル、ボランティア活動などにも重きを置いており（半澤、2007）、学業に意味を見出していない学生も存在することから、学問に対して消極的であることが大学での不適応感につながったと考えられる。加えて、「自由」と大学環境への適応感尺度のすべての下位尺度との間に正の関連がみられた。上位大と同様に、大学の自由な学業文化は学生の大学環境への適応感に影響を与えていた。

表 6 生徒化心性および大学学業文化と適応との関連（中位大）

	居心地の良さの感覚	被信頼・受容感	課題・目的の存在
学問に対する消極的姿勢	-.076	-.129*	-.165**
大学生活に対する非自律性	.058	.156**	.061
表面的な真面目さ	.023	-.056	-.040
教授過程	.051	.072	-.028
自由	.305***	.274**	.389***
興味	.035	.033	.116*
学生	-.026	-.028	.015
重相関係数	.310***	.312***	.447***

値は標準偏回帰係数

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

下位大において、「居心地の良さの感覚」は、「大学生活に対する非自律性」($\beta=.175$, $p<.1$)、「教授過程」($\beta=.165$, $p<.1$)、「自由」($\beta=.288$, $p<.01$)、「興味」($\beta=.151$, $p<.1$)との間に正の関連、「学生」($\beta=-.293$, $p<.01$)との間に負の関連がみられた。「被信頼・受容感」は、「大学生活に対する非自律性」($\beta=.236$, $p<.05$)、「自由」($\beta=.369$, $p<.001$)との間に正の関連、「学生」($\beta=-.187$, $p<.05$)との間に負の関連がみられた。「課題・目的の存在」は、「大学生活に対する非自律性」($\beta=.198$, $p<.05$)、「自由」($\beta=.307$, $p<.001$)、「興味」($\beta=.199$, $p<.05$)との間に正の関連、「学問に対する消極的姿勢」($\beta=-.208$, $p<.05$)、「学生」($\beta=-.172$, $p<.05$)との間に負の関連がみられた。

下位大において、「大学生活に対する非自律性」と大学環境への適応感尺度のすべての下位尺度との間に正の関連がみられた。偏差値の低い大学では、学習習慣を身につけるための教育が数多く実施されている（葛城、2007）など、学生に対する大学側のサポートが手厚いことが明らかになっている（櫻田、2007、山田、2009）。このような環境では、学生

は自主的に行動するよりも、大学の指示に従っておくことで適応するようになると考えられる。「自由」と大学環境への適応感尺度のすべての下位尺度との間に正の関連がみられた。大学の自由な学業文化は、大学偏差値の高低にかかわらず適応感に影響を与えると考えられる。「学生」と大学環境への適応感尺度のすべての下位尺度との間に負の関連がみられた。偏差値の低い大学の学生は高校時代と同じように、決められた授業を履修してまじめに受講するという態度が定着している（山田、2009）ことから、授業中に教室を出入りする学生や授業に出ない学生がいることが不適応感につながったと考えられる。

表7 生徒化心性および大学学業文化と適応との関連（下位大）

	居心地の良さの感覚	被信頼・受容感	課題・目的の存在
学問に対する消極的姿勢	-.132	-.144	-.208*
大学生活に対する非自律性	.175 [†]	.236*	.198*
表面的な真面目さ	.034	.010	-.081
教授過程	.165 [†]	.110	.064
自由	.288**	.369**	.307***
興味	.151 [†]	-.021	.199*
学生	-.293**	-.187*	-.172*
重相関係数	.487***	.443***	.536***

値は標準偏回帰係数 [†]p < .1, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

4. 総合考察

4-1. 生徒化心性尺度について

生徒化心性尺度では、「学問に対する消極的姿勢」、「大学生活に対する非自律性」、「表面的な真面目さ」の3因子が抽出された。「学問に対する消極的姿勢」については、これまで多くの先行研究において、生徒化した学生は受動的な学業態度をとることが明らかにされている（伊藤、1999、山田、2010）。ただし、大学生の学業に対する意欲のなさは、「生徒化」という言葉が使用されるようになる前から指摘されていることでもある（鉄島、1993、下山、1996）。「大学レジャーランド」と言われていた頃の学生は学業に対する意欲が低下すると授業を欠席したり、大学に来なくなったりするという特徴があったが、現代の学生は意欲が低下してもとりあえず単位のために出席し授業を受けるという点で違いがある。したがって、「学問に対する消極的姿勢」は、以前の学生だけでなく近年の生徒化した学生にもみられる特徴であり、学業に対して消極的であるという点で生徒化心性の構成要素として納得のいく因子であると考えられる。

「大学生活に対する非自律性」については、先行研究において、生徒化した学生は「やるべきことは大学が用意してくれる」「大学の教員にもっと指示してほしい」と考えていることが指摘されている（濱嶋、2005、岩田、2015）。一般的に、大学では高校までと比べてやりたいことを自分で見つけて探究していくといった学生の自主性が求められる。それにもかかわらず、何をすれば良いのかを指示してほしいと考えているのは、「指示待ち世代」

と言われる現代の学生の特徴であると考えられる（岩田、2015）。したがって、「大学生活に対する非自律性」は、大学生活において自主性がなく大学や教員の指示を欲しているという点で生徒化心性の構成要素として納得のいくものであると考えられる。

「表面的な真面目さ」については、先行研究において、現代の学生は授業を真面目に受けようとする一方で、その受講態度は消極的であり成績を重視していると指摘されていることから（山田、2010）、現代の学生には、授業に対してやる気がないが成績のために真面目でしようとする姿勢がみられると考えられる。近年の大学生の学びについて溝上（2006）は、高校までに身につけてきた基礎知識を土台として自分でものを考え、答えのない勉強をすることができるようになるのが大学であるにもかかわらず、試験で点をとるための勉強や資格取得のための勉強といった「答えがある勉強」ばかりしていると指摘している。したがって、「表面的な真面目さ」は、学ぶ内容よりも出席することや成績を重視しているという点で生徒化心性の構成要素として納得のいくものであると考えられる。以上のことから、生徒化という心性を幅広く測定できる尺度を作成することができたといえる。

4-2. 生徒化心性の大学差について

生徒化心性および大学環境の認知の大学の偏差値による差を検討したところ、大学の偏差値によって生徒化心性の高低が異なることが明らかになった。「学問に対する消極的姿勢」は偏差値が高い大学ほど高く、「大学生活に対する非自律性」と「表面的な真面目さ」は偏差値が低い大学ほど高かった。先行研究では、偏差値が低い大学ほど教員は研究よりも学生の教育に力を入れており、また偏差値の低い大学の学生ほど授業で学ぶ内容よりも成績を重視することが明らかになっている（葛城、2011、櫻田、2007）。また、近年の学生には大学において資格取得を重視する傾向が高まっており、特に偏差値の低い大学ほどその傾向が高い（葛城・山田、2005）。大学の種類を「伝統総合大学」「中堅大学」「新興大学」の3つに分類し、それぞれの大学に通う学生の意識を調査した武内（2011）も、「伝統総合大学」には友人と遊ぶことやサークル活動を楽しみたいといった「大学レジャーランド」と言われていた頃と同じタイプの学生が多いのに対し、「新興大学」には専門的な知識を身につけ資格を取得したいといった学生が多いことを明らかにしている。これらのことから、偏差値が高い大学の学生には学習意欲の低さという以前から指摘されている特徴がみられ、偏差値が低い大学の学生には自律性のなさや表面的な真面目さといった、近年指摘されている特徴がみられたと考えられる。

4-3. 生徒化心性と大学への適応感の関連について

生徒化心性と大学環境への適応感との関連を大学の偏差値別に検討したところ、生徒化心性が大学での適応感にどのように影響するかは大学の偏差値によって異なることが明らかになった。大学の偏差値が低くなるほど生徒化心性が大学での適応感に及ぼす影響が大きくなり、特に下位大では「大学生活に対する非自律性」が大学での適応感に正の影響を

与えることが明らかになった。現在の大学、特に偏差値の低い大学では、学習習慣や学習レディネスの修得を目指した教育が数多く実施されている（葛城、2007）など、偏差値の低い大学では学生に対する大学のサポートが手厚いことが示されている（櫻田、2007、山田、2009）。このような環境にいるため、学生は自らの意思で行動するよりも、大学が指示することに従っておくことで適応していくようになると考えられる。

5. おわりに

本研究では、大学生の生徒化心性に関する尺度を作成し、大学生の生徒化心性および大学環境の認知と適応感との関連について、偏差値による大学差を考慮して検討してきた。これまで、教育社会学を中心として検討されてきた、大学生の「生徒化」という現象について、心理学的アプローチを試み、生徒化という心性を幅広く測定できる尺度を作成することができた。加えて、偏差値による大学差を考慮した検討によって、次の二点が明らかになった。

- ・「学問に対する消極的姿勢」は偏差値が高い大学ほど高く、「大学生生活に対する非自律性」と「表面的な真面目さ」は偏差値が低い大学ほど高かった。
- ・大学の偏差値が低くなるほど生徒化心性が大学での適応感に及ぼす影響が大きくなり、特に下位大では「大学生生活に対する非自律性」が大学での適応感に正の影響を与える。

これらの結果から、大学生の「生徒化」という現象について考察する。第一に、大学生の「生徒化」という言葉によって、個別の大学における実態をみえなくさせる危険性が指摘できる。これまでみてきたとおり、偏差値の高い大学では、学問に対する消極的姿勢がみられ、偏差値の低い大学では、大学生生活に対する非自律性や表面的な真面目さがみられる傾向にあった。これはつまり、大学生の「生徒化」という同じ言葉であっても、大学によって生じている現象が異なる可能性があることを示している。異なる現象を一口に大学生の「生徒化」とまとめてしまうと、乱暴な現状把握となり、改善のための議論をすることもままならない。議論をはじめるとは、個別の大学における実態をつぶさに観察する必要がある。また、本研究では医学部などの自由度の無いカリキュラムの学部の学生は対象にしなかったが、学部間の差についても考慮して、議論していく必要があるといえる。

第二に、偏差値の低い大学において、学生の大学生生活に対する非自律性を前提とした議論を進める必要性が指摘できる。これまでみてきたとおり、偏差値の低い大学では、大学生生活に対する非自律性が大学での適応感に正の影響を与えていた。これはつまり、少なくとも、大学での適応という観点では、大学生生活に対する非自律性は、有効に機能している、ということを示している。大学の手厚いサポートがある環境で、学生は指示に従い、大学に適応する。いわゆるボーダーフリー大学において課題を抱えた学生が多く入学している現状に鑑みると、まずは大学に適応してもらうことが先決だともいえる。問題は、大学卒業後の生活である。就職し、大学の手厚いサポートがなくなった環境で、自律していない

という特徴が職場への適応をもたらすとは想像しにくい。偏差値の低い大学においては、大学生活に対する非自律性を前提としながらも、在学中に少しずつ大学のサポートを少なくし、学生を自律した存在へと導くことが求められるといえる。

参考文献

- 安藤史高 (2007) 「保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響」『一宮女子短期大学紀要』46、71-78 頁。
- ベネッセ教育総合研究所 (2000) 「教育改革と人材育成の方向性 2000 年版」
(<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3321>) < 2020 年 11 月 15 日アクセス >
- 浜島幸司 (2003) 「コラム「生徒化」する大学生たち」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部、90 頁。
- 濱嶋幸司 (2005) 「大学生は「生徒」である。それが、なにか?—1997 年・2003 年調査データより—」『上智大学社会学論集』29、191-208 頁。
- 半澤礼之 (2007) 「大学生の学業適応を捉える視点—「学業における大学生と大学のミスマッチ」と「生徒化」から初期適応を捉える試み—」『大学院研究年報』36、107-117 頁。
- 五十嵐透子・野村珠紀・岩崎眞和 (2014) 「大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連」『上越教育大学研究紀要』33、107-114 頁。
- 伊藤茂樹 (1999) 「大学生は生徒なのか—大衆教育社会における高等教育の対象—」『駒澤大学教育学研究論』15、85-111 頁。
- 伊藤茂樹 (2015) 「学生と生徒」『日本労働研究雑誌』657、62-63 頁。
- 岩田弘三 (2015) 「「大学の学校化」と大学生の「生徒化」」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』5、65-87 頁。
- 葛城浩一 (2007) 「F ランク大学生の学習に対する志向性」『大学教育学会誌』29 (2)、87-92 頁。
- 葛城浩一 (2011) 「ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識 ―大学教授職の変容に関する国際調査」を用いた基礎的分析—」『大学論集』42、159-175 頁。
- 葛城浩一・山田浩之 (2005) 「F ランク大学における学習活動—資格取得に駆り立てられる学生たち—」『日本教育社会学会大会発表要旨収録』57、65-66 頁。
- 松下佳代 (2012) 「大学カリキュラム」京都大学高等教育研究開発推進センター編『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版、25-64 頁。
- 三保紀裕・清水和秋 (2011) 「大学進学理由と大学での学習観の測定—尺度の構成を中心として—」『キャリア教育研究』29、43-55 頁。
- 溝上慎一 (2006) 『大学生の学び・入門 大学での勉強は役に立つ!』有斐閣アルマ。
- 岡田努 (2012) 「現代青年の有人関係に関する新たな尺度の作成—傷つけ合うことを回避する傾向を中心として—」『金沢大学人間科学系研究紀要』4、19-34 頁。

- 大久保智生・青柳肇（2003）「大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の観点から」『パーソナリティ研究』12（1）、38-39頁。
- 大矢芳彦（2016）「大学教養科目の大人教授業における学生の意識調査」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』50、253-263頁。
- 櫻田裕美子（2007）「Fランク大学の学生の学習意識」『高等教育研究叢書』90、57-68頁。
- 下山晴彦（1995）「男子大学生の無気力の研究」『教育心理学研究』43、145-155頁。
- 下山晴彦（1996）「スチューデント・アパシー研究の展望」『教育心理学研究』44、350-363頁。
- 新立慶（2010）「大学生の「生徒化」論における批判的考察」『教育論叢』53、67-75頁。
- 神藤貴昭・伊藤崇達（2000）「高等学校と大学の接続に関する研究（その2）—大学の学業文化への参入と学習方略の変容—」『京都大学高等教育研究』6、35-52頁。
- 武内清（2011）「大学生の学生文化とキャンパスライフをめぐって」『比治山高等教育研究』4、77-88頁。
- 田中每実（2013）「なぜ「教育」が「問題」として浮上してきたのか」広田照幸・吉田文・小林傳司・上山隆大・濱中淳子編『シリーズ大学5 教育する大学—何が求められているのか』岩波書店、21-47頁。
- 鉄島清毅（1993）「大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—」『教育心理学研究』41（2）、200-208頁。
- 山田浩之（2009）「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』58、27-35頁。
- 山田浩之（2010）「地方大学における学生の学習行動と学習意識—大学の学校化がもたらす学習の形骸化—」『比治山高等教育研究』3、37-48頁。
- 谷田川ルミ（2009）「大学類型差の分析—難関大学、中堅大学、中堅女子大学、一般大学の比較—」武内清編『キャンパスライフと大学の教育力—14大学・学生調査の分析—』（平成19～21年度文部科学省研究補助金（基盤研究（B））大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—研究成果・中間報告書）
- 渡部真（2005）「「大学の学校化」とモラトリアム」『現代のエスプリ』460、130-141頁。